

## 豊かな言語・文化観を持った英語教員を育てるための英語科教育法の実践

A Practice of the Pre-Service Education of English Teachers: To Nurture Learners' Sensitivity toward Languages and Cultures through English Language Education

仲 潔

NAKA Kiyoshi

### 1 はじめに

本稿は、日本における中学校（および高校）の英語教員養成を目的とした授業である「英語科教育法」の筆者の実践を紹介するものである。

筆者の担当してきた英語科教育法では、一貫して、1) 理想の英語教師像、2) 理想の英語授業像の構想を学生に課してきた。実践は2005年度から行っている。

5年目の2009年度前期（英語科教育法Ⅳ）からは、受講生の増加に対応するために、授業外での議論の場として、インターネット上にブログを開設した。授業時間外においても、受講生各自の意見交換が行われるように配慮している。なお、それ以前の授業では、質疑・コメントの時間を十分に確保できていたので、受講生から出た意見に筆者のコメントを加えたプリントを翌週に配布する形式をとってきた。

筆者のこれまでの教育経験から、英語教員となることを希望する学生の中には、英語優越主義ないしは英語帝国主義とでも呼べる言語・文化観を持った者は少なくない。具体的には、次の通りである。

- ① 英語を他言語よりも優れた言語であると考える（あるいは、信じる）こと。
- ② 英語はロマンス語系の言語とは違って、屈折語尾（変化）が少ないため習得し易い言語と考える（あるいは、信じる）こと。
- ③ 英語は②のような言語的特質と、通用度の高さから、「世界語」としてもっともふさわしい言語であると考える（あるいは、信じる）こと。
- ④ したがって、世界の人間が英語を覚えて当然であると考え（あるいは、信じる）

こと。

- ⑤ 英語を知らない（使えない）人間（民族）は劣ると考える（あるいは、信じる）こと。  
(中村1994: 18)

筆者は、初回の講義において「世界には国がいくつぐらい存在すると思うか」「世界にはいくつぐらい言語があると思うか」を受講生に尋ねるようにしている。もちろん、「そもそも言語は数えられる名詞なのか」(cf. 酒井1997など)といった問いが可能である。また、「国」の数は政治的（あるいは軍事的）理由により常に流動的である。言語が可算名詞であるとした場合、「言語の数」は研究者によってまちまちである。これらの諸問題をとりあえずおくとして、学生からはしばしばおどろくべき答えが返ってくる。極端な例をあげれば、「国の数は30」や「言語の数は3つ」というものがあつた。これほどではないにせよ、毎年、受講生の過半数以上が、実数値（と信じられているもの）からは程遠い数値を述べるのである。そして、そのような学生のほとんどが、「英語ができれば大丈夫」と無邪気に信じ切っているのである。

もちろん筆者は、英語の便利さを否定するつもりは毛頭ない。しかしながら、偏向した言語・文化観のままでは、授業での自作プリントや授業内外での発言にそれがあらわれてしまう。さらには、英語教員が教科書の扱っている内容をじゅうぶんに活用できないと考えられる。結果として、英語教員の偏向した言語・文化観は、「教師という権威」も手伝って、その教え子のうちに再生産される危うさがある。

本稿では、豊かな言語・文化観を持った未来の英語教員を育成するために筆者が行ってきた「英語科教育法」の実践を紹介する。

## 2 英語科教育法 I・IVの基本方針

本節では、まず筆者の英語科教育法における理念を、次に授業全体の構成を紹介する。なお、岐阜大学教育学部英語教育講座の卒業要件となっているのは、中学校英語教員免許であるので、以下の議論は特に断りのない限り、中学校教育を念頭においている。

### 2.1 理念

英語科教育法のありかたについての議論は、これまでに論じてきた(仲2002, 2008, 2009b)。ここでは詳細に述べることはせず、あくまでも簡潔に提示する。

現在、筆者は「英語科教育法 I」および「英語科教育法 IV」を担当している。そのいずれにおいても初回のオリエンテーション時に、教育基本法・学校教育法などから「学校教育における英語科教育」の位置づけを明示している。本稿では、その位置づけや英語科教育の意義などを詳細に検討する余裕はない。ゆえに、結論だけを述べれば、「人間教育に基づく英語科教育法」ということになる。

学校教育では、「人格／人間性の完成」が根底に流れていなければならない。現実的にそれが可能であるか否か／そもそも人格とは何か、といった議論があることは承知している。しかしながら、教育現場を訪問ししばしば不安になることは、買い物の仕方や道の尋ね方等を、「英語で」できるようにさせることが、はたして「人格の完成」とどう関係があるのか、である。そこには、知的好奇心の喚起がほとんど見られないのである。もちろん、「おもしろい」授業をすることには大賛成である。しかし、その「おもしろさ」は、教育場面である限り、単なる“amusing”(だけ)ではなく、“interesting”の要素がなければならないと考える(cf. 中村1993)。また、「コミュニケーション能力」を身につけさせるという目標に対し、いわゆる4技能(Listening, Speaking, Reading, Writing)の訓練が目的化されているが、実際の「コミュニケーション」では、それらのいずれの「技能」にも“Thinking”が根底に流れていることを忘

れてはならないと考える(森住1992, 2001)。

この位置づけの元に、以下の様な方向性を提示している(詳細は、仲(2002)を参照せよ)。

- ① 外国語教育の多様化を支持(前提条件)
- ② ことばの3機能
- ③ 国際英語の理念

それぞれ補足しておこう。①を前提条件としているのは、英語が、現状の学校教育制度の中で「外国語科」として位置づけられているからである。実際には、ほとんどの場合、英語が課せられているが、だからといって、英語の授業において英語以外の言語を排他的に扱う正当な理由はない。ただでさえ、英語一辺倒の外国語教育政策である。それゆえに、外国語教育の多様化の支持を前提条件としなければ、英語一辺倒や英語帝国主義の助長に陥ってしまう。ただし、外国語教育の多様化は、選出される「外国語」が多くの場合、社会的な大言語であり、結局のところ言語間の不平等は完全には除去されないという点に留意しなければならない(仲2003)。

次に、②の「ことばの3機能」とは、森住(1992)によると次のとおりである。

1. ことばの伝達機能  
4技能の訓練や最終的にはスピーチなど、主としてコミュニケーションに関する実用的な技能論や方法論を扱う。
2. ことばの認識機能  
ことばによって現実の切り取り方やものの見方が異なるなど、ことばの体系や規則と発想法の関係、ことばと文化の関係に関する知識を扱う。
3. ことばの関係機能  
嘘やことばによる人間の差別、言語戦争など、ことばと人間、ことばと社会の関係、及びことばそのものをいかにとらえるかの視点や観点(言語観)を扱う。

(森住1992:30)

昨今、「コミュニケーション能力」の育成において、上記の1.ばかりに注目が集まっている傾

向が強いが、異文化コミュニケーション研究の成果から、2.や3.といったことばの働きも、実際のコミュニケーションには不可欠な要素である (cf. Byram1997)。

最後に③は、英語間の不平等の是正である。言語そのものが多様であると同時に、「英語」と呼ばれる言語も、地域や性・年齢などによって実に多様な姿を持っている。とりわけ「地域」による違いについては、英語の変種間の差異という単なる「事実」に、上下関係という「価値観」がしばしば付せられる。例えば、「インド英語」は「アメリカ英語」よりも「劣る」と考える（あるいは、信じる）言語観である。

現実的に（教育現場で）は、いわゆる「標準的」とされる英語がモデルとされることが多い。しかしながら、英語の変種を差別的に扱うという姿勢／態度は、「人格／人間性の完成」という教育目的からは外れてしまう。また、言語の多様性を尊重する前提条件とも矛盾する。さらに、現行の『学習指導要領』においても、英語の多様性への尊重は促されている点も忘れてはならない。

実際の講義では、それぞれ①～③の項目に対して詳細な説明を行うが、本稿ではここでおくことにする。

## 2.2 授業の構成

全15回の授業は、1) 筆者による講義、2) 学生による授業実演、から構成される。さらに、3) 「理想の英語教師像／英語の授業」についてレポートを課している。

1) では、将来の英語教師にとって必要であると筆者が考える要素を講義形式で扱っている。それらの要素を受講生各自が自らの授業実演において反映することが求められている。これが2) に当たる。授業実演の後に、他の受講生からの質疑・コメント、および授業外でのインターネット上でのやり取りを踏まえ、受講者は「理想の英語教師像」「理想の英語の授業」をレポートすることになっている。いわば、「授業実演」で提示する「理想の英語教師像・英語授業像」の改訂版である。これらを後の教育実習（ひいては、教員採用後の教育実践）に繋げられるよう関連

性の中に位置づけさせている。なお後述するように（→3.1および「巻末資料」）、課題レポートには、講義・ブログ・オフィスアワーで紹介する関連文献から得られる視点・知見も盛り込むこととしている。

このような実践を2005年度から少しずつ改訂を加えながら行ってきた。本稿ではこれらすべてを詳細に紹介することは不可能である。そこで以下では、2009年度前期に岐阜大学において行った「英語科教育法Ⅳ」を中心に紹介する。筆者が現在担当している「英語科教育法Ⅰ」では、英語科教育法の入門書を用いて輪読および議論を重ねた後に、学生に授業実演を行ってもらっている。それに対し、「英語科教育法Ⅳ」では、自作の講義用プリントを用いて講義・議論を経て、授業実演へと進む点で異なる。当然のことながら、英語科教育法Ⅳの方が、より高次の「授業実演」を望んではあるものの、基本的な方針については共通している。

## 3. 講義: 人間教育としての英語科教育法

2009年度前期に行った「英語科教育法Ⅳ」の講義用プリントの目次を掲載しておく。なお、受講生の人数、所属専攻学科構成、および関心を考慮し、また最新の研究内容を反映させるため、毎年若干の変更がある。

### 3.1 講義の概要

まず、講義で扱ったテーマを提示しておこう（各タイトルは、学生に配布したプリントのままである）。

#### 【英語科教育法Ⅳ 講義用プリント目次】

1. 人間教育としての英語科教育
2. 日本人の英語達人はどの様に英語学習に取り組んだか?: 日本人のための英語学習法を考える
3. 「コミュニケーション」重視の英語科教育, 再考
4. 日英語発想法の比較
5. 英語科教育と「歴史」認識

6. 英語学習者論: 良い教師は生徒の学習ストラテジーを知っている
7. 英語教師論

これらのテーマを、受講生の人数に応じて数回に分けて講義を行う。2009年度に配布した講義用プリントは総頁数42である。各テーマについては空所補充・書き込み式にしてあり、その他に各テーマの関連推薦図書を紹介している。また、英語科教育法関連の用語解説やコラムも掲載している。

### 3.2 各テーマの概要

各テーマについて詳細に言及することは本稿の目的から外れてしまう。そこで、ここでは、講義部分の全体像を俯瞰できるようにするために、各テーマの概要を簡潔に述べておく。なお、「1. 人間教育としての英語科教育」については、2.1において既に言及したのでここではおくことにする。

上記目次の2.および3.は、いずれも英語学習を中心に講義している。英語教員は、生徒＝英語学習者に英語の学び方を教授し、その知見を授業に反映することが求められる。同時に、自らも英語学習者である。そのような観点から、2.および3.を取り上げている。

次に4.は、2.1で述べた「ことばの認識機能」についての講義である。また、5.は「ことばの関係機能」である。いずれも抽象的な議論だけとならないよう、なるべく具体例を提示したり、英語教科書での実例を示しながら講義している。

6.では、学習ストラテジーを中心に取り上げている。また、教室内の多様化、すなわち、日本語を第1言語としない学習者の存在、英語学習に対する学習者の嗜好などを取り上げ、学習者の多様性について、英語教育という文脈の中で講義している。

最後の7.では、現職の英語教員や過去の受講生からの「声」を反映しつつ、1.～6.までの総括をまじえて、「英語教師像」について再考させるよう講義している。その際、各県教委が求める「教師像」についての紹介もしている（受講生の希望する都道府県を取り上げている）。

## 4. 授業実演

2009年度の受講生は、英語教育講座専攻学生および副専攻の学生を合わせると30名超であった。そこで、先述した「講義」部分を第5回目までとし、第6回目から最終回までを、学生による授業実演とした。

### 4.1 授業実演の時間配分

1回あたりの授業実演担当者は3名で、各30分の持ち時間とした。30分のうち、25分程度を使って授業をしてもらい、残りの時間を他の受講生による質疑応答の時間とした。なお、受講生の少ない場合（例えば、2009年度後期の「英語科教育法Ⅰ」では、英語教育講座専攻の学生のみ）は、1回あたり2名の授業実演とし、一人当たりの持ち時間は45分である。

### 4.2 授業実演にあたっての要件

授業実演の担当者には、準備において次のような条件を課した。

<機械的・技術的側面について>

- ・ 使用する教科書は、中学校向け文部科学省検定済み英語教科書であれば、どの出版社のものでも、どの学年のものでもよい。
- ・ 教科書を使わない授業であってもかまわない。ただし、その授業案が「教科書のどのあたりを元に構想されたのか」を明示しなければならない。
- ・ 学習指導案は、50分のものを用意する。
- ・ 50分のうち、「みんなに見てもらいたい部分」を25分程度の割り当てで決める。
- ・ 教科書の1つの課を、何回に分割して授業を行うのか、また授業実演はそのうちのどの部分に相当するのかを明示する。
- ・ 自作プリントを作成する。
- ・ 生徒観、題材観、指導観、授業計画、評価基準などをすべて網羅した学習指導案を、授業実演前日までに提出する。その際、配布プリントなども提出する。

<理念・方向性について>

- ・ 「ことばの3機能」のうち、伝達機能＋認識機能、または伝達機能＋関係機能のい

ずれかを元に授業を構成する。可能であれば、3機能の全てが入ったものが望ましい。

- 伝達機能では、なるべく4技能のバランスを考える。その際、機械的なコミュニケーション活動とならないように、4技能の根底には“Thinking”があることを意識して計画する。
- 認識機能／関係機能については、可能であれば、コミュニケーション活動そのものに取り入れること（必ずしもコミュニケーション活動を行うことはないが）。
- 教科書を朗読する場合には、音声機材を用いずに、自らが発音のモデルを務める。
- 自作プリントに英文を掲載する場合には、文法においても例文の内容についても細心の注意を払う。
- その他、講義で学んだ内容を積極的に取り入れる。

2009年度英語科教育法Ⅳの場合、受講生の多さから授業実演自体は、わずか25分程度しか確保できなかった。それでも50分の学習指導案を提出させた。授業のうち、どの部分を削ったり、話をかいつまむようにするか、あるいはどの部分で時間がかかったり、不足したりするかなどを、体感し、工夫して欲しいからである。

#### 4.3 学習指導案作成段階でのオフィスアワーについて

さて、受講生は上記のような条件にそって授業実演の内容を考えてくるわけだが、筆者はその過程で何度も相談にのる。オリエンテーション時に公表している「オフィスアワー」は、各自1回ずつ30分程度である。しかし、実際には少ない学生でも1回あたり60分を3～4回、多い場合では、1か月以上前から足しげく研究室に通う学生もいた。

研究室で学生と授業案をともに考えていると、講義部分への理解度がどの程度であるのかが手取るように分かる。それらを優しいことばで言い換えたり、異なる角度から再度説明したり教授することを大切にしている。これにより、学生の知的好奇心を喚起するようにしている。

学生が興味を示せば、関連する文献を紹介し、貸し出しをしている。また、休日を返上してオフィスアワーを行うことも何度もあった。このように、少しでも「良い授業」をするためには、地道な努力が必要であることを身を持って示すようにつとめた。つまり、筆者自身が「役割モデル」として未来の英語教員に接するようになってきたつもりである。

オフィスアワーでは、学生の準備してきた原案に対して、助言を与えながら授業案をより具体的に、かつ立体的なものへと発展させていくことを主眼においている。かなりの程度、具体的な助言／指導をしなければ、授業を構想できない学生がいないわけではないが、こちらも感心させられるような授業を作り上げる学生も少なくない。

なお、学習指導案のうち、「生徒観」は、受講生各自が「どのようなクラス状況で練習をしてみたいか」という設定で行っている。

例えば、学習者の身体的特徴である。筆者は耳が少し不自由なのであるが、そのような学習者が教室にいる場合、「音声中心」のコミュニケーション活動では、非常に不利になる。場合によっては、授業への不参加ともなるし、英語嫌いの学習者を増加させる温床ともなってしまう。また、学習ストラテジーという観点もここに反映できる。すべての英語学習者が必ずしも「文法嫌い」であったり「音声中心に向いている」というわけではないのである。さらには、昨今ますます増加の傾向にある在日外国人生徒を視野に置くことも重要である。その場合では、英語オンリーの講義で良いのか、あるいは日本語を用いる場合の生活言語／学習言語の使い分けなどの配慮なども重要となってくる。このように、「生徒観」ひとつをとってみても、講義部分での項目をいかに理解できているのかが分かる。また、直接的には、実際に教壇に立った場合に、生徒に対する理解が授業成立の上でいかに重要であるのかは言うまでもないことであろう。

これらの他に、いわゆる「既習事項／未習事項」を把握し、授業実演での学習目標との関連性を持たせるために、教科書の前後についても確認することを進めている。

授業実演中には、他の受講生は授業実演担当者が設定した「生徒観」に基づき、中学生役を演じてもらう。同時に、授業実演後の議論のために、気づいた点などを書き留めておくように指示している。

## 5. ブログでのコメント・議論

授業実演後の議論・質疑応答は、実際には5分未満となることが多い。これは、授業実演そのものが時間を超過してしまうことが主な理由である。

そのことを補うために、受講生のすべてが、私の開設しているインターネット上のブログにコメントを投稿することになっている。このコメントの投稿により、議論や質疑応答の質・量を高めることができるだけでなく、出席確認の代用にもなり、授業時間をフルに活用できるようにしている。

ブログへのコメントは、「出席点」としては、1人の授業実演者に1つの書き込みとしている。しかし、授業実演が充実したものであった場合、他の受講生も刺激を受けるためであろうか、「書き込みの数」が受講生の人数を超えることが度々ある。つまり、ブログ上で学生の自発的な意見のやり取りが見られるのである。

なお、教育実習時に、ブログでの自分に対するコメントをプリントアウトして持参する学生もいる。彼／彼女たちによると、「コメントを見れば教育実習で何に留意すべきか分かる」とのことであった。このように、当初はこちらの期待していない効果も見られ、今後はより充実した「コメント機能」となるよう改良を重ねたい。

ここで、具体例を掲載すれば説得力がより増すことは承知している。しかしながら、もしそうすれば膨大な量になってしまう。したがって、ブログについては筆者に直接問い合わせただければ閲覧可能となるようにしたいと思っている（現状では、受講生や筆者が出会った現職教員のみ公開している）。

## 6. 課題レポートについて

オリエンテーション時に提示する課題図書および講義での各テーマの関連推薦図書から、「必

読」「選択必読」を選んでもらう。そのうち、2つは日本語資料、1つ以上は英語資料としている。これらを読んだ後、講義の内容、授業実演での議論などを踏まえ、「理想の英語教師像」および「理想の英語授業」についてレポートを課している。

分量は、A4用紙（40字×36行）を5枚程度である。もちろん、「英語科教育法」の単位認定のためという直接的な目的もあるが、受講生各自が「教育実習前に自分で読み返す」という、いわば「未来への自分に向けた手紙」という性質も持たせている。それゆえに、分量をある程度制御し、「読みやすさ・読み返しやすさ」を条件としている。ただし、実際には10枚以上ものレポートを提出する意欲ある学生が少なくないことも付け加えておこう。

なお、本論文の最後に「参考文献」および「巻末資料」を載せているが、それらが上記の文献リストを集約したものでもある。

## 7. おわりに

以上のように、「講義、実践、レポート」を柱として英語科教育法を実践してきた。それらの「橋渡し」となっているのは、オフィスアワーでの「相談」やブログ上での「議論・意見交換」である。

しばしば、「キャリアを積みば、授業はうまくなる」と見聞きする。もちろん、そういった部分があることを否定するつもりはない。しかし、果たしてそれがすべてだろうか。例えば、プロ野球選手について考えてみよう。プロ野球界に入ることができるだけでも、じゅうぶん「素質」が認められているはずである。しかし、実際に「活躍」できるのは、ほんの一握りであり、そのような選手は、10年や20年もかかって「活躍」しているわけではない。プロ野球界に入り、数年のうちに結果を出しているからこそ、10年以上にもわたって「活躍」し続けているはずである。話を「英語教員」に戻そう。目の前にいる生徒は、キャリアを積むまで待ってくれるだろうか。こたえは自明であろう。キャリアがあるからこそ身につくものは当然ある。そして、それは非常に大切なものであろう。しかしなが

ら、英語教育の「プロ」になる前に、身につけておかなければ「キャリア」では補えないものがあるはずである。そのような「英語教員としての資質」を、英語科教育法を通じて少しでも身につけさせてあげたいと考えている。

筆者が教員免許更新講習を受け持った際、現職の先生方に、「英語科教育法」の過去の受講生の学習指導案をいくつか見ていただいた。それに対し、次のような言葉をいただいた。

「もう10年くらい先生をやってそんな授業ですよね」

「即戦力じゃないですか」

もちろん、お世辞と取ることもできるだろう。本心から、このような言葉をもらえる将来の英語教員を一人でも多く育成できるように、今後も自らの英語科教育法を問い直し続けたいと考える。

### 【参考文献】

<日本語によるもの>

酒井直樹 (1997) 「多言語主義と多数性: 同時的な共同性をめざして」三浦信孝 (編) 『多言語主義とは何か』藤原書店, pp.228-245.

佐藤学 (2009) 「言語リテラシー教育の政治学」マイケル・W・アップル+ジェフ・ウィッティ+長尾彰夫 (編著) 『批判的教育学と公教育の再生: 格差を広げる新自由主義改革を問い直す』明石書店, pp.39-55.

佐藤慎司+ドーア根理子 (編著) (2008) 『文化, ことば, 教育: 日本語/日本の教育の「標準」を越えて』明石書店.

里見実 (2005) 『学校でこそできることとは, なんだろうか』太郎次郎エディタス.

仲潔 (2002) 「英語教育は英語帝国主義にどう対処するか」森住衛監修・言語文化教育研究論集編集委員会(編) 『言語文化教育学の可能性を求めて』 pp.246-263.三省堂.

— (2003) 「教科書におけるEnglish・英語と言説—中学校英語教科書の分析を通して—」『異言語教育の今日的課題』 pp.57-67. 大阪大学大学院言語文化研究科.

— (2005) 『英語教育における言語観: 期待される「英語学習者像」』大阪大学大学院博士学位論文.

— (2006) 「「<生きた英語>と分裂的言語観: 『学習指導要領』に見る母語話者至上主義と英語の多様性」社会言語学刊行会. 『社会言語学』第6号. pp.19-43.

— (2008) 「言語観教育序論: ことばのユニバーサルデザインへの架け橋」『社会言語学』第8号 (『社会言語学』刊行会) pp.1-21.

— (2009a) 「「ことば」について考えるための「外国語コミュニケーション (英語) I」授業」『岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究』第11巻. (岐阜大学教育学部) pp.201-216.

— (2009b) 「言語観教育の展開」『社会言語学』第9号 (『社会言語学』刊行会) pp.113-138.

仲潔・大谷晋也 (2007) 「中学校英語教科書に見られる価値観: 「夢の実現」を迫られる学習者たち」『言語と文化の展望』 pp.129-143. 英宝社.

中村敬 (1989) 『英語はどんな言語か: 英語の社会的特性』三省堂.

— (1993) 『外国語教育とイデオロギー: 反=英語教育論』近代文藝社.

— (1994) 「再び『英語帝国主義』について (上): 筑紫哲也氏に答える」『週間金曜日』第24号.

ましこ・ひでのり (2002) 『ことばの政治社会学』三元社.

森住衛 (1992) 「英語教育題材論 第2回 Thinkingを忘れた英語教育」『現代英語教育』第29巻第2号, pp.30-31. 研究社出版.

(2001) 「英語教育の根本を考える—時代を乗り越える不変なものとは何か—」『現代英語教育の言語文化学的諸相』2-15. 三省堂.

<英語によるもの>

Byram, Michael (1997) *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence. Multilingual Matters.*

Fairclough, Norman (1991, 2001 2<sup>nd</sup>) *Language and Power.* (貫井孝典 監修, 吉村昭市+脇田博文+水野真木子 『言語とパワー』大阪教育図書. 2008)

— (1995) *Critical Discourse Analysis: The Critical Study of Language.* New York: Longman.

Jenkins, Jennifer (2000) *The Phonology of English as an International Language.* New York: Oxford University Press.

Pennycook, A. (1994) *The Cultural Politics of English as an International Language,* London: Longman.

— (1998) *English and the Discourse of*

*Colonialism*, London: Routledge.  
 — (2001) *Critical Applied Linguistics: A Critical Introduction*. London: Lawrence Erlbaum Associates.  
 Phillipson, R.(1992) *Linguistic Imperialism*, Oxford: Oxford University Press.

【巻末資料】

- \* 一部抜粋。
- \* 「参考文献」に掲載した資料については割愛

1. 人間教育としての英語科教育

<日本語による文献>  
 小森陽一 (2004) 「教育基本法改悪と「戦争をする国」」 『現代思想』4月号.青土社. pp.78-88.  
 斎藤兆史 (2003) 『英語達人塾』中公出版.  
 日野信行 (1997) 「国際英語の概念に基づく英語教育の研究—その体系化への序論—」 『言語と文化の対話』89-101. 英宝社.  
 — (1999) 「英語教育における『国際英語』研究の課題—国際英語思想史及び言語文化論の視点を中心に—」 『言語文化研究』25号:185-203. 大阪大学言語文化部.  
 — (2001) 「国際英語の多様性と英語教育」 『言語文化研究』27号:261-283. 大阪大学言語文化部.  
 — (2002) 「『国際英語』教育のカリキュラム」 『言語文化研究』28号:313-334. 大阪大学言語文化部.  
 — (2003) 「<国際英語>研究の体系化に向けて—日本の英語教育の視点から—」 『アジア英語研究』第5号:5-43. 日本「アジア英語」学会.  
 峯村勝 (2002) 『英語教育の基本問題』言語教育研究所.  
 望月昭彦編著, 久保田章ほか (2001) 『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』大修館書店.  
 仲潔 (2006) 「英語論の構図: 英語帝国主義論と国際英語論の包括的理解のために」 日本言語政策学会. 『言語政策』第2号. pp.1-20.  
 中村敬 (2004) 『なぜ、「英語」が問題なのか?—英語の政治・社会論』三元社.

<英語による文献>

McKay, Sandra L. (2002) *Teaching English as an International Language*. Oxford: Oxford University Press.  
 Pennycook, A. (1994a) *The Cultural Politics of English as an International Language*, London: Longman.  
 — (1995) “English in the World / The World in English” in Tollefson, J.W.(ed.) *Power*

*and Inequality in Language Education*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.34-58.

— (2001) *Critical Applied Linguistics: A Critical Introduction*. London: Lawrence Erlbaum Associates.  
 Phillipson, R. (1999) “Voice in Global English: Unheard Chords in Crystal Loud and Clear” *Applied Linguistics* 20/2:265-276.  
 — (2003) *English-Only Europe?: Challenging Language Policy*. New York: Routledge.

2. 日本人の英語達人はどの様に英語学習に取り組んだか?: 日本人のための英語学習法を考える

<日本語による文献>  
 伊村元道 (2003) 『日本の英語教育200年』大修館書店.  
 大西泰斗+ポール・マクベイ (2008) 『これで話せる! 英語のバイエル』  
 岡田伸夫 (2003) 「コミュニケーション時代の文法教育」 『異言語教育の今日的課題』 pp.1-12. 大阪大学大学院言語文化研究科.  
 斎藤兆史 (2000) 『英語達人列伝: あっばれ, 日本人の英語』中公新書.  
 — (2003) 『日本人に一番合った英語学習法: 先人たちに学ぶ「四〇〇年の知恵」』祥伝社.  
 白井恭弘 (2004) 『外国語学習に成功する人, しない人: 第二言語習得論への招待』岩波書店.  
 日野信行 (1987) 『トーフルで650点: 私の英語修業』南雲堂.

<英語による文献>

Canagarajah, A.Suresh. (1999) *Resisting Linguistic Imperialism in English Teaching*. Oxford: Oxford University Press.  
 Cook, Vivian. (1999) “Going Beyond the Native Speaker in Language Teaching” *TESOL QUARTERLY*. Vol.33.No.2.Summer:185-209.  
 Smith, L.E. and Rafiqzad, K. (1979) English for cross-cultural communication: the question of intelligibility, *TESOL Quarterly* 13, 3: 371-380.

3. 「コミュニケーション」重視の英語科教育, 再考

岡田伸夫 (2003) 「コミュニケーション時代の文法教育」 『異言語教育の今日的課題』 pp.1-12. 大阪大学大学院言語文化研究科.  
 斎藤兆史 (2003) 『日本人に一番合った英語学習法』祥伝社.



酒井直樹 (1996) 『死産される日本語・日本人—「日本」の歴史-地政的配置—』新曜社.

デリダ, ジャック (1981) 『ポジション』高橋允昭 (訳) 青土社.

—— (1999) 「他者の単一言語使用」守中高明 (訳) 『現代思想』92-103. 青土社.

—— (2001) 『たった一つの、私のものではない言葉—他者の単一言語使用—』守中高明 (訳) 岩波書店.

仲正昌樹 (2005) 『デリダの遺言: 『生き生き』とした思想を語る死者へ』双風社.

<英語による文献>

Clark, Romy. (1992) “Principles and Practice of CLA in the classroom” In N. Fairclough (Ed.), *Critical Language Awareness*. Pp. 117-140. London: Longman.

#### 4. 日英語発想法の比較

石井敏+久米昭元ほか (1997) 『異文化コミュニケーション・ハンドブック: 基礎知識から応用・実践まで』有斐閣選書.

シタラム, K.S. (1985) 『異文化間コミュニケーション: 欧米中心主義からの脱却』東京創元社.

古田暁[監修] (1990) 『異文化コミュニケーション・キーワード』有斐閣選書.

森住衛 (2004) 『単語の文化的意味: friendは「友だち」か』三省堂.

#### 5. 英語科教育と「歴史」認識

<日本語による文献>

森住衛 (1992) 「英語教育題材論 第7回 ことばに係わる題材」『現代英語教育』1992年4月号~1993年3月号. 研究社出版.

仲潔 (2007) 「英語の<負>の歴史と<英語学習者像>: 中学校英語教科書の分析を通して」『多言語社会研究会 年報』第3号: 71-94.

<英語による文献>

Hino, Nobuyuki (1988) “Nationalism and English as an International Language: the History of English Textbooks in Japan” *World Englishes*. Vol.7, No.3. pp.309-314.

Naka, Kiyoshi (2007) “Values Represented in the Current English Textbooks in Japan: An Idealized Images of English Language Learners” in *Asian English Studies*. Vol. 9: 57-77.

#### 6. 英語学習者論: 良い教師は生徒の学習ストラテジーを知っている

<日本語による文献>

辰野千壽 (1997) 『学習方略の心理学: 賢い学習者の育て方』図書文化.

中村敬 (1993) 『外国語教育とイデオロギー: 反=英語教育論』近代文藝社.

ブルデュー, ピエール (1999) 『教師と学生のコミュニケーション』藤原書店.

ラミス, ダグラス (1976) 『イデオロギーとしての英会話』晶文社.

村野井仁 (2006) 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習方・指導法』大修館書店.

<英語による文献>

Schmeck, R.R. (1986) “Individual Differences and Learning Strategies.” In C.C. Weinstein et al. (Eds.)

#### 7. 英語教師論

<日本語による文献>

植田晃次 (2006) 「『ことばの魔術』の落とし穴: 消費される『共生』」植田・山下 (編著) 『「共生」の内実: 批判的社会言語学からの問いかけ』pp.29-53. 三元社.

太田春雄 (2000) 『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院.

河原俊昭 (2004) 『自治体の言語サービス: 多言語社会への扉をひらく』春風社.

鄭暎恵 (2003) 『<民が代>斉唱: アイデンティティ・国民国家・ジェンダー』岩波書店.

数土直樹 (2001) 『理解されない他者と理解されない自己: 寛容の社会理論』勁草書房.

東川直樹 (2002) 「教室の多様化に対応する外国語教育のあり方をめぐって: 日本の中高等教育における英語教育を中心に」森住衛 (監修) 『言語文化教育学の可能性を求めて』pp.99-115. 三省堂.

仲潔 (2007) 「北九州市の言語教育サービス」河原俊昭 (編) 『外国人住民への言語サービス』明石書店.

—— (2009) 「国際離婚に伴う言語問題: 制度的問題点と言語観を中心に」河原俊昭+岡戸浩子 (編) 『国際結婚: 多言語化する家族とアイデンティティ』明石書店.

<英語による文献>

Arnetha F. Ball and Rashidah Jaami Muhammad (2003) “Language Diversity in Teacher Education and in the Classroom”